

— 5. 第27回気象講座「新しい気象」 —

気象講座雑感

日本気象協会北海道支社 中田 琢志

第27回気象講座「新しい気象」は、去る7月27、28日に開催され、初日、2日目とも20名(延べ21名)の受講者に参加いただきました。

今年度も例年通り熱心な受講者に恵まれ、盛況のうちに無事終了しました。

1日目は、札幌市青少年科学館で「雷(かみなり)現象の不思議」(講師:防衛大学校 道本光一郎氏)、「エアロゾルを通して見る気候変動 ~大気化学の観点から~」(講師:北海道大学低温科学研究所 宮崎 雄三氏)の講義と館内見学を行いました。

道本講師は、落雷の映像や写真をふんだんに使い、雷(かみなり)現象をわかりやすく解説して下さいました。北陸で多い冬季雷は、地上気温がプラスの場合に激しい発雷になることがわかったということで、地上気温の低い北海道では少ないということでした。また、雷から身を守るには木から45度以内の範囲で2m以上離れてしゃがんだ方がよい、とのことで有益な講演でもありました。

宮崎講師は、一般になじみの薄いエアロゾルについて気候への影響の観点から説明して下さいました。エアロゾルは一般的には日傘効果によって温暖化の一部を相殺するが、エアロゾルの一種であるブラックカーボン(すす)は周辺大気を暖めるとのことでした。また、有機エアロゾルは、水に溶けやすいものは雲の生成等にも影響を与えるが、生成過程を含め未知の点が多く、今後の研究課題ということでした。

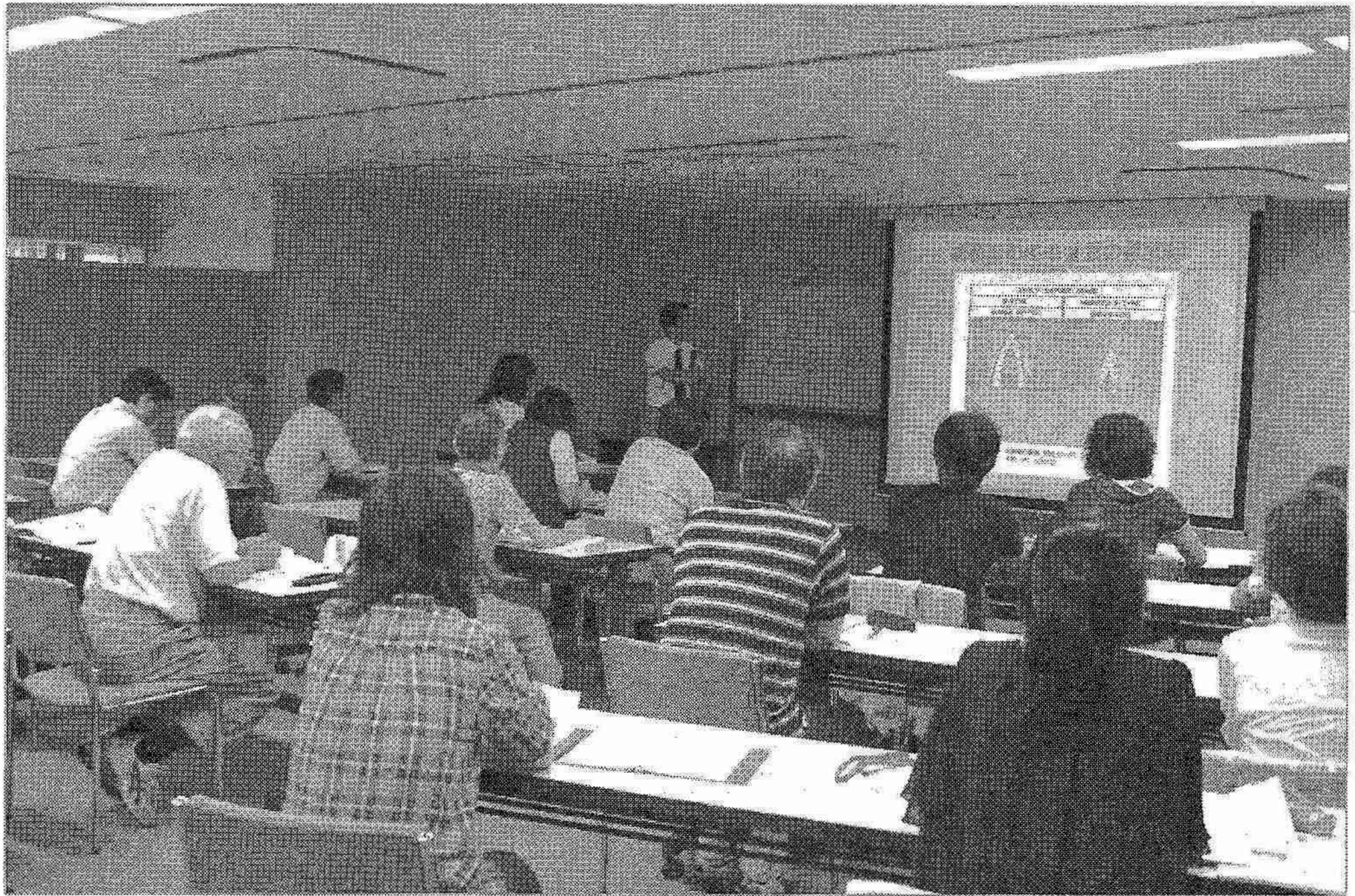
2日目は、札幌管区気象台で「気象データから考える雪崩発生危険度」(講師:日本気象協会北海道支社 中村 一樹氏)、「地球の気象、惑星の気象、実験室の気象」(講師:北海道大学地球環境科学研究所 堀之内 武氏)の講義を行いました。

中村講師は、雪崩の発生メカニズムと予測手法について、事例と豊富な図・写真を用いて分かりやすく説明下さいました。最も危険なのは面発生表層雪崩で、数cmの降雪後に晴天、放射冷却・まとまった降雪と続くと起きやすいとのことでした。今後は定量的な雪崩危険度の推定方法の確立を目指すということです。なお、天気予報の裏話も含め、盛りだくさんな講演で、お昼休みにも個別の質問が続いていました。

堀之内講師は、天気図でおなじみの高低気圧を惑星の気象・実験室の気象の観点から説いて下さいました。高低気圧の発生は地球の自転速度に密接に関係しているということ、金星や火星の大気の流れや条件を特化した実験結果を示しながら解説され、新鮮な感じで聞くことができました。金星や火星の大気成層圏の「準2年周期振動」の実験での再現には数年を要したとのことで、ビデオ映像で流れが反転する様は感動的でした。

今後多くの方々にご参加いただき、最新の気象知識を生活に役立ていただければと考えています。参加者アンケートの抜粋を以下に記します。

- ・(雷について) 日常的に横行している俗説の不確かさに気づいた。
- ・エアロゾルが、地球全体の気候へ与える影響が、想像以上に大きいことがわかりました。
- ・雪崩の発生しやすい条件が、気象と密接に関連していることがわかりました。
- ・傾圧不安定や、準2年周期など聞いたことはあるけれど、詳しく聞くのは初めてで、とても勉強になりました。



受講風景（札幌市青少年科学館）



見学風景（札幌管区気象台）